

2015 年度ポケットゼミ「沖縄・久高島研究」  
久高島合宿文集



撮影：鎌田教授（2015年9月15日早朝）

## 目次

巻頭言	鎌田東二	●p. 03
2015 年度ポケットゼミ「沖縄・久高島研究」メンバー		●p. 06
「久高島フィールドワークを終えて」	花室結月	●p. 07
「久高島合宿を終えて」	尾崎蛍太	●p. 10
「久高島フィールドワークレポート」	川崎蓉子	●p. 12
「ポケゼミ『沖縄・久高島研究』合宿レポート」	北原慎也	●p. 14
「久高島レポート」	柳澤友里亜	●p. 24
「ゼミ合宿を振り返って」	門前斐紀	●p. 26
編集後記	門前斐紀	●p. 27

## 巻頭言

### 2015 年度ポケゼミ「沖縄・久高島研究」久高島合宿文集に寄せて

わたしがポケゼミ「沖縄・久高島研究」を始めたのは、2012 年度からだ。東日本大震災が起って、文明や社会のあり方、そこでの人間の生き方や学問的探究のあり方などを深く問いかけ、再構築していく必要があると感じていた。

また、京都大学の中でも非常に小規模なところの未来研究センターという研究機関に勤めていて、教育学研究科の大学院での「臨床教育学演習」などの授業はあり、大学院生と議論する場はあったものの、学部生、とりわけ 1 回生と接する機会はほとんどなかった。

そこで、フレッシュパーソンにぜひ「沖縄・久高島」の存在を通して、民俗学や宗教学や地域研究などフィールドワーク系の研究の面白さや醍醐味を経験してもらいたいと、本ポケゼミを始めたのだ。

最初から「沖縄・久高島研究」と地域限定しているので、それなりの意識と関心を持つ学生が集まり、1 班 3~4 名の編成にして、途中で 2 度のミニフィールドワーク体験（5 月の葵祭と 7 月の祇園祭）や、フィールドワーク報告会（祇園祭フィールドワーク報告会）をするので、学生相互に交流も生まれたと思う。1 回生の時期にこのような少人数ゼミで親しく交わる経験を持つことはとてもよいことだと思っている。

わたしは、大重潤一郎監督（1946-2015）と 1998 年に出逢い、それから「神戸からの祈り」「東京おひらきまつり」「NPO 法人沖縄映像文化研究所」「NPO 法人東京自由大学」など、いろいろなイベントや探究の場を共にしてきた。

その大重潤一郎監督が外部講師・現地講師で、わたしが内部講師・引率教員というスタンスで、比嘉康雄著『日本人の魂の原郷—沖縄久高島』（集英社新書、2000 年 5 月）をテキストに全篇をしっかりと読み込み、班別に発表してもらいながら、討議していき、それを基盤に現地に繰り出すという手法を取った。

そして、その最後の仕上げと新しいスタートが、9 月の「久高島大運動会」に合わせて行なう「久高島合宿」であった。

残念ながら、今年は、合宿初日の 9 月 11 日から、高野山大学で「日本スピリチュアルケア学会第 8 回学術大会」が開催され、わたしも指定発表者となっていたために、高野山に赴かなければならず、また「久高島大運動会」当日の 9 月 13 日にはこの未来研究センター主催の「第 1 回京都こころ会議」が開催される日でその最後に「総括」をしなければならなかったために、4 泊 5 日の最後の 1 泊 9 月 14 日と 15 日だけの参加とならざるを得なかったのは大変残念ではあった。

が、しかし、わたしがいなかったために、大学院生の文化人類学者のアルタンジョラーさんや認知神経科学者の藤野正寛君や、鎌田研究室の門前斐紀研究員がみっちり付き添ってくれて、学生目線に近いところで小まめな指導やガイドができたのではないかと思う。

9 月 14 日、最後の夜に、学生たちに、7 月 22 日に享年 69 歳で死去したばかりの大重潤一郎さんの遺作『久高オデッセイ第三部 生章』を観せて、一人一人感想を聞いた。大重潤一郎監督の『久高オデッセイ第一部 結章』（2006 年）では監修（と言っても、

実質製作担当)、『久高オデッセイ 第二部 生章』(2009年)では製作を担当した。そして『久高オデッセイ 第三部 風章』(2015年9月15日完成)も製作を担当した。

久高島は、沖縄本島東北部に浮かぶ人口200名ほどの大変小さな島だが、琉球王朝時代から「神の島」として、東方ニライハラー(ニライカナイ)信仰を保持してきた。ここでは、12年に1度、午年に神女(カミンチュ)になるための儀式イザイホーが行なわれてきたが、1978年以降、その伝統も途絶えている。2014年はその午年に当たったが、イザイホーの儀式は行なわれなかった。その儀式の当日の2015年1月5日(旧暦2014年11月15日満月の日)、久高殿で若い神女の人が祈りを捧げている姿が『久高オデッセイ 第三部 風章』のラストシーンとなった。

大重潤一郎は、2000年に「縄文」(福井県三方町縄文博物館常設展示映像)と「原郷ニライカナイへー比嘉康雄の魂」、2001年に「ビッグマウンテンへの道」(ナレーション:山尾三省)を発表し、それを「古層三部作」を名付けた。その後、大重は沖縄に移住して、故比嘉康雄氏の遺志を受け継ぎながら久高島と那覇市に住み着いて「久高オデッセイ 第一部」の製作に取りかかった。

が、2004年10月に脳内出血で倒れ、再起不能の状態にまで追い込まれながらも、激痛に耐えつつ、半身不随の体に鞭打ち、2006年に「久高オデッセイ 第一部 結章」を完成させ、さらに2009年に「久高オデッセイ 第二部 生章」を完成。2015年には「久高オデッセイ 第三部 風章」を完成させ、その2週間後に死んだ。

大重は、デビュー作「黒神」(1970年/75分)から、「大阪のチベット」と呼ばれた能勢町のミサイル基地建設の反対運動を記録した「能勢～能勢ナイキ反対住民連絡会議」(1972年)などを経て、「水の心」(1991年/30分)、「風の島」(1996年/45分)、「小川プロ訪問記」(2001年/62分)など、次々に自然と人間と文明との葛藤と調和への希求を描く記録映画を発表し続けてきた。

その大重潤一郎が満身創痍の身心に鞭打って完成させたのが、「久高オデッセイ」三部作である。ここには大重の「いのちの唄」が詠唱されている。映像の詩人にして気配の魔術師、大重潤一郎の「いのちの唄」がある。

2008年8月、「久高オデッセイ 第二部 生章」を製作するに際して、大重潤一郎監督が画いた文章があるので、最後に引用しておきたい。

<1970年代から私は、自然と伝統文化に重点を置いた映画作りに勤しんできた。しかし日本は、圧倒的な現代化および資本主義の荒波に見舞われていた。そういう中で、内心、いずれは拠って立つ、最後の瀬戸際を沖縄久高島と思い定めていた。

そして、2000年、琉球弧、中でも久高島を写真に記録し、研究してきた比嘉康雄の最期に立ち会うことになった。久高島は、神の島として知られるようになったイザイホーが途絶え、全国のマスコミや文化人が潮が引くように去った後であった。2001年、私は比嘉氏の遺言を記録した「原郷ニライカナイへ」を島で上映した。その時に、その場を去ってはならぬ思いに駆られ、2002年正月から久高島に半ば移住し、12年がかりの「久高オデッセイ」三部作をスタートすることになった。

久高島は、2000年の歴史の中で、その文化を変えていない。それは、土地を神からの預かりものとし、現在まで私有地は一切存在しない。また1500年ごろ始まったと推定されるイザイホー以前の、二十を数える神事を今も継続している。まさに日本列島の

基層文化を維持してきたラストランナー、アンカーの役割そのものを担っている。しかし一方で、島の対岸にある沖縄本島をはじめ、日本列島の現実はどうだろう。世界にしてもしかり、今も大自然に生かされ、慎ましやかに暮しているネイティブや或いは祖先たちの姿とは程遠い。とりわけ、昨今は目まぐるしい変動にさらされ、あたかも果てしなく異次元空間に彷徨っていくかのようである。

離島としてのハンディを負ってきた久高島は、いま徐々に変化の兆しを見せている。それは、神人をはじめとする女たちが島を出て、他の島の女たちと交流し、自らを複眼で見る機会を得ていることである。その動きは、子どもたちにも及び、来月には沖縄最北部の山原（やんばる）に出かけ、深い森と水源を体験し、自分たちの島を捉え直すことであろう。海人として生きてきた男たちは、魚が少なくなったために、海草などの栽培漁業や島の自然を活かした生活を模索している。

これから、久高オデッセイ第二部は、撮影の大詰めに入ってゆくが、必ずや太古から受け継いでいる自然や文化を根に、生命に沿った未来に分け入ってほしいものと願っている。>

その「久高オデッセイ」三部作をすべて撮り終え、創り終えて、大重潤一郎はニライカナイを通過して「生命に沿った未来」に分け入っていると確信している。

2015年10月6日 鎌田東二記

## 2015 年度沖縄・久高島研究メンバー

### 1 班

花室結月	文学部一回生：合宿メンバー
松村豪	文学部一回生：合宿メンバー
尾崎蛍太	理学部一回生：合宿メンバー
吉村郁哉	法学部一回生

### 2 班

川崎蓉子	文学部一回生：合宿メンバー
北原慎也	文学部一回生：合宿メンバー
和田優哉	法学部一回生：合宿メンバー

### 3 班

河合美代	経済学部一回生：合宿メンバー
東大貴	文学部一回生
清水海斗	薬学部一回生

### 4 班

安藤健	法学部一回生
河守晃芳	経済学部一回生

### 合宿参加・アシスタント

柳澤友里亜	教育学部四回生：合宿メンバー
藤野正寛	教育学研究科修士二回生：合宿メンバー
アルタンジョラー	人間・環境学研究科博士課程一回生：合宿メンバー

### ゼミ担当教員・アシスタント

鎌田東二	こころの未来研究センター教授：合宿メンバー
門前斐紀	こころの未来研究センター研究員：合宿メンバー

(敬称略)

## 久高島フィールドワークを終えて

京都大学文学部 1班 花室 結月

### ◇まちづくりについて考えたこと

久高島には、一族の財力の象徴として築かれた立派な石垣や石畳などが当時の姿を保って現在に伝えられていた。また、島の豊かな自然は今でも人間の都合で伐採されることなく島の暮らしと共存していた。このような情景を目にした私は当初、自分の関心分野に基づき、「久高島では伝統的な町並みやそこでの暮らしを保全するためにどのような努力がなされているのか」というテーマを設定した。しかし、実際に現地を訪れ島の方々のお話を伺ううちに、久高島の自然が太古の昔より保たれ続けているのは、久高島が離島であるという地理的環境や自然に宿る神への篤い信仰という文化的要因、さらに古来の地割制の関係で、島に第三者が侵入して観光地化など産業的に利用されることがなかったという政治的要因など、島が様々な面で特殊な環境下に置かれていたことが大きな理由であるということが浮かび上がった。それゆえ、そのようなバックグラウンドを持たない一般的な地方自治体のまちづくりに久高島のケースをそのまま転化し活かすのは難しそうだと考えた。

しかし、合宿を終え那覇に上陸した際には、コンビニエンスストアや標識、道路といった近代的な建造物を従来の町並みに融合させるための工夫がなされている区画を目にすることが出来た。このような景観保全の例は京都にも多く存在するので、実際にフィールドワークをしてみたいと思った。



△白壁に橙の瓦屋根の町並みに合わせ、道路にもその二色が配されている。

道路標識も木目素材がメインで用いられ、南国ののどかな雰囲気に溶け込んでいる。



△首里城近くの某有名コンビニエンスストアも、特別バージョンのカラーリング。  
看板も地面に近い、低めの位置に設置されていた。

さらに、久高島という普段とは違った環境に 5 日間身を置いて肌で感じたことや、久高島と自分の故郷や旅行先の都市とを比較検討して気づいたことを自分の中で整理してみた結果、良いまちの条件として現時点では次の三点が挙げられるのではないかと、という結論に辿り着いた。

1. 自然が豊かであること
2. 適度な人口
3. 適度な文明化

最初の二点は、那覇や夏季休業中に訪れた東京との比較により浮かび上がったものである。この二都市では常にせわしなさや落ち着かなさを感じており、妙な精神的疲労を溜めてしまった。対して久高島では都市のそれとは全く異質の独特のリズムで時が流れているのが感じられた。久高島には人工的建造物が少なく人口がそれほど多くないため、騒々しくなく、ゆるやかな生活が可能なのであろうと考えた。

三点目は、TeRRA エコの里を経営しておられる古堅苗さんにお話を伺ったことにより得られた観点である。曰く、久高島は厳しい自然・地理的環境下での生活を余儀なくされていたため、その分自然に対する畏敬の念が強まった面もあるが、貯蓄が難しい水の確保など生活のための作業に追われ、庭に花を植えたりするなどの心の余裕を持つことが長らく出来なかったのだという。しかし、近年は電気や水道といったインフラの整備が進んだことにより家事負担が軽減され、少しずつ時間的・精神的ゆとりが生まれつつあるのだ、と古堅さんは語る。ガスコンロの進出により家々から火神の拠り所であるカマドが姿を消していった例など、それまで文明化というと伝統的な生活文化を崩壊させてしまう害悪のイメージが強かったが、文明の流入も一概に嫌ってしまうものでもないのだな、と感じた。



## ◇全体総括

今回のフィールドワークでは非常に幅広く多くの物事に触れ、またそれらについて自分の頭で考えるという経験が出来た。1回生の夏という早い段階でフィールドワークの楽しさや難しさを実感しその基礎を身に付けられたことも、これからの自分の学術研究や人生そのものにとって非常に大きい財産になった。ゼミの友人たちとの意見交換は、久高島をめぐる様々な問題に関しての洞察を深める上で非常に有意義であったのみならず、社会全体の情勢に対する問題意識を高めることにも繋がった。さらに、個人的な話になるが、この島で過ごした5日間は、自分自身を見つめ直し、これからの方針について熟考する素晴らしい好機にもなった。

入学当初に何気なく心惹かれて選んだポケゼミであったが、合宿を終えた今振り返ってみるとこれもきっと何かの縁であったのだろうと感じる。今回のフィールドワークでは準備不足で深め切れなかったと感じる点もあるので、反省点を次に活かすとともに、久高島が現在抱えている少子化や人手不足といった数々の問題をどのようにして乗り越えていくのかを見守りたいし、ぜひ再び足を運びたいと思う。

.....

## 久高島合宿を終えて

理学部 尾崎蛭太

この久高島合宿に参加して幾人かの方からお話を伺い、また島のあちこちを見学しました。その中で興味深いと感じたものはいくつかありましたが、それを一つの論としてまとめることは今の私には困難でした。まず、以下にそれを列挙したいと思います。

第一点。古堅苗さんという方から、次のようなことを伺いました。古堅さんのお姉さんがイザイホーに参加したとき、一番嬉しかったのは、先輩に髪を結ってもらったときであったと話していた、それは普段の水汲みなど生活のことに追われるばかりの気詰まりな生活から解き放たれ、髪を下ろし綺麗に着飾ってまるで少女に戻ったかのようであったからではないか、云々。

第二点。私たちの班が話を伺ったのは内間豊さん、真栄田苗さん、古堅苗さんの三人の方からでしたが、祭祀に関することに限っても、驚いたことに、三人の方のお話はそれぞれかなりの部分で異なったものでした。それぞれの方が自らの経験や調査によって、祭祀の歴史や意味についての解釈をしているようでした。

第三点。その解釈の中に、もとの思想としてはなかったであろう科学の知識（およびその曲解）が混じっていたこと。

さて、これらの点から疑問として生じたこと、およびそれに関しての現段階で考察できた限りのことを、書いてみたいと思います。

宗教と個人の関係性について。宗教的なものは集団として成り立つものですが、その中には多くの場合、個人の自由は制限されます。久高島では子供は生まれたときから「女は神人、男は海人」と決められていたとありました。ここに、そのようなことはどこまで認められるべきなのか、という疑問があるのです。最近、パキスタンの少女マララ・ユスフザイさんが女子教育を求める活動をしていることが大きな話題となりました。ここにはイスラム教の解釈の一つに女子の教育は認められないというものがあることが関係しているようですが、このように宗教的な教えと個人の願いが反した場合はどう考えればよいのでしょうか。五ヶ条の御誓文に「旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」というのがありますが、このような考え方は「陋習」として否定するべきなのかも知れません。しかし果たして「天地の公道」なるものがあるのでしょうか。国際社会は女子教育を当然の人権として認めるべきとしますが、それは本当に当然のことなのでしょうか。また、そのような犠牲を強いるシステムの中からはしか得られないものも各種あるのではないかという想いがあります。そういった意味で、巫女的存在として役割を果たすことになった方の、個人的な環状・感想は興味深いのです。齋院を務め孤独な少女時代を送った式子内親王の和歌に近いものがあると思うのです。

また、同じ島で同じ祭祀をみてきた、行ってきた人々が、それぞれのしかたで祭り・宗教を解釈していることについても、宗教と個人の関係といえるかと思います。この現象は、どんな宗教によってもごく一般的にあることでしょうか、特に久高島の祭祀のような、明確に文書や教会のようなものに規定されず口伝によるものの場合、次の世代に伝わる度に個々の解釈もともに伝えられることで、少しずつ変化を生んでいくことになるでしょう。このことがどれほど影響するのだろうか、ということに疑問を覚えました。

個人の解釈の話に絡むのですが、その解釈に科学の一部の知識を（たまに曲解しつつ）融合させて世界観をつくることは、外部の思想にふれて旧来の考えが変質するという歴史上繰り返されてきたことの、現代的な例として見ることはできないかと考えます。授業中の発表でも少し触れましたが、疑似科学を生むことがあるこの働きは、人間として自然なものではないのだろうかと思うのです。個人的に科学の発見が宗教的世界観に影響を与える例として地動説や進化論よりも好きなものが、「ラプラスの悪魔」の話です。「もしある時点において全宇宙のすべて物体の位置と速度を知ることの出来る悪魔が存在したとすれば、その悪魔には未来および過去のすべての時点での宇宙のすべてが予想できる」という、ニュートン力学の原理である因果律の帰結を述べた思考実験は、悪魔の部分を神と読みかえればカルヴァンの予定説に近いものです。人間の自由意志もすべて宇宙開闢のときから決まっていたことであり、人間の力ではどうしようもないという運命論です。このラプラスの悪魔をハイゼンベルクの不確定性原理が否定し、前の瞬間の物体の位置と速度が分かっても、ミクロの世界においては次の瞬間は確率論的にしか予測できないと導いた結果、科学と予定説は矛盾することになりました。他にも、「確率的」の解釈によっては神が存在しようと次の瞬間の世界に影響を与えることが出来ないということになり、神の存在そのものを否定するようなことにもなり得ます。人々はこれにどのように対応したのか、という疑問。また、近年原発事故に起因して起きた農産物の風評被害。ここにも、科学の一部を援用して自らの不安を正当化しようとする疑似科学があるのではないか。「我が子を戦場に行かせたくない」ということを掲げていた主婦による安保法反対デモなどにも、うまく説明できないのですが、似た構造を感じるのです。このあたりをもう少しじっくり考えたいと思っています。

……あまりに思考がまとまらず、支離滅裂を極める文書になってしまいましたことをお詫びします。本を読みつつ少しずつ考えを整理して、これからもこれらのテーマについて探っていきたいと思っています。このたびはこのような問題に気付く機会を与えて下さったことに感謝しています。ありがとうございました。

.....

## 久高島フィールドワークレポート

文学部 1 回生 4 組 川崎蓉子

### 祭祀と島の自然観について

4 日目の朝に宿泊交流館の屋上に上り、朝日が昇るのを見て、久高島の自然観を肌で感じた。島の周りを取り囲む海がほぼ 360 度見え、世界が島を中心とする大きな円のように見えた。東の方角は何もなく、ただ海が広がっていた。この方向に神々の世界ニラーハラーがあると考えることは、とても自然な気がした。

久高島の自然観は、太陽が西に沈んだあと、地底を通過してまた東から昇るというもので、死んだ人間の魂もこの循環に乗って、一旦西に行き、地底を通過して東方のニラーハラーにたどり着き、やがて守護霊としてこの世に戻ってくると考えられている。島の全体と、それを丸く取り囲む海を見ていると、その世界観に納得がいく気がした。

5 日目の朝にはイシキ浜から昇る朝日を拝んだ。久高島の人々は昔から、神々の世界から新しい太陽が昇ってくるのをこうして見ていたのかと思った。普段京都で見る朝日とも少し違い、朝日を浴びることで何かエネルギーが得られるような気持ちになった。

久高島の自然観や祭祀などは、敬虔な信仰といったものよりも、肌で感じる世界観や、生活の実感であるように思った。

### 島言葉の問題

久高島に着いてから、久高島の独特の言葉について知りたいと思うようになった。久高島の言葉は沖縄本島など、沖縄の他の地域の言葉とも違うらしい。久高島では、島言葉を話せるのは 80 歳以上の人だけで、それを聞き取って理解できるのは 5、60 歳代以上の人だけだと聞いた。

私も実際に島民の方が島言葉で会話されているのを聞いたが、全く聞き取れなかった。島言葉を話せるお年寄りも、言葉が分かる方の中では島言葉で話し、島言葉が分からない人に話す時だけ日本語を使っていた。また小中学生や若い人は、確かに標準語しか使っていないようだった。

沖縄の言葉自体が危機に瀕している中で、久高島の言葉も消滅しつつある。今はまだ、少なくとも 80 歳以上の人の中では、生きた言葉として使われていることが分かったが、このままでは数十年後にはなくなってしまうかもしれない。

久高島の言葉は、その祭祀とも密接に関わっていると思う。久高オデッセイの第 3 部に、

祭祀のときに、文字で書かれた神歌を読みあげている場面があった。祭祀は今も続いているものの、多くの人にとって、神歌の言葉は自分たちの普段使う言葉とは関係のないものになっているのではないかと思う。言葉が時代とともに変化していくのは当然だし、神歌に使われている言葉は今久高島のお年寄りが使っている言葉よりもっと古いものかもしれない。しかし、島言葉と全く違う、外から入ってきた日本語しか使わなくなれば、昔ながらの島言葉を使う祭祀と、人々の暮らしはより大きく隔たってしまうと思う。今回島言葉についてあまり掘り下げられなかったのは残念だが、沖縄全体の言葉についてももう少し調べ、久高島の言葉と祭祀の関係について考えてみたい。

## 久高島の現実

久高島は祭祀についてだけでなく、様々な場面で高齢化による後継者不足などの問題を抱えていることが分かった。島言葉の話者が減っていることもその一つだろう。少子化に加え、子供たちが高校から島外に出ていき、そのまま島外で大学に進学したり就職したりして、帰ってこないことが多いことも原因と思われる。私がお話を聞いた91歳の男性は、子供たちがみな島を出て、沖縄本島をはじめ日本全国のいろいろなところに住んでいるようだった。

離島や山間部など、日本の多くの過疎地域が抱えている問題を、久高島も同様に抱えているらしい。

一方で、それらの問題を解決しようという動きもある。宿泊した久高島宿泊交流館も、観光客などを呼び込むためのものだし、宝くじ事業でつくられたという留学センターも、久高島に活気をもたらすことに寄与しているようだ。映画に出てきた小中学生による漁の体験など、伝統を継承させる活動もあるようだ。

また、久高島の運動会には島中の人々が参加しているだけでなく島外からも参加者がおり、小中学生だけでなく全員で楽しむ行事となっていた。授業で学んできた祭祀と同じく、運動会もまた、島と人々を結びつける重要なイベントであると感じた。

久高島に5日間滞在して、比嘉康雄さんの本や祭祀に関する映画を見てイメージしていたものとは少し違う、現在の島の姿を見ることができた。久高島は古くからの祭祀を守り続けてきただけの古色蒼然とした島ではなく、一方で自然に寄り添った生活を忘れてしまった社会でもない。現代社会における様々な問題に直面し、それに対応する一方で伝統を守りながら、島民の方々が日々の生活を営み続けている生きた島だと思う。

.....

## ポケゼミ「沖縄・久高島研究」合宿レポート

0100275613 文学部 1回生 2班 北原慎也

### 1. はじめに

このレポートでは内容を大きく 2 つに分けた。前半が旅行記、後半が通常のレポートである。後半だけでもよいのだが、前半部を入れたのは、後で読み返しても今回の合宿をつぶさに思い返せるようにという（自己満足でしかない）意図である。それだけ今回の合宿が、今もひとつひとつの情景が鮮明に思い浮かぶほどに思い出深いものだったということだ。しかし人間は忘れていくものだから、ここに書き留めておくことにした。完全に一人称視点なのに加えてかなり砕けた感じで書いたので、レポートとしては相応しくないかもしれないことを先にお詫び申し上げる。どうか生温かい目で見守ってほしい。

### 2. ちょっと不真面目なレポート —単なる旅行記—

<0日目 2015.09.10(木)>

今回の旅（もはや合宿という表現をやめてしまった）の前後に那覇で一泊ずつすることにした。お供は和田くん（以下和田）。待ち合わせは関西空港。多くの方は神戸空港からスカイマークを使ったと思われるが、我々は飛行機の時間の都合で関空から JTA を選択。

関空のゲートを通過する際、なんと和田の荷物が検査に引っかかる。本人は思い当たる節が無い模様だが…調査の末、筆箱からハサミが発見されあえなく没収。本人はものすごく残念な様子である。これ以降止まらないハサミトーク。「あのハサミが無いと生きていけない」みたいな。今思い返すと心底くだらなかった。

那覇空港到着後、ゆいレールへ。きっぷの使い方に戸惑う 2 人（2 次元バーコードをかざすものだった）。沖縄は進んでるなあ。県庁前駅で降りてホテルロコアナハに到着。時刻は 23 時近かったと思うが、何を思ったか国際通りで夕食をとることに。その場の思い付きで恐ろしい。魚メインの洒落たレストランに落ち着いたのだが、なんだかんだで午前 1 時過ぎまでいたような気がする。

ホテルに戻ってさっさと風呂&就寝。詳細は省くが、和田はイス×2 とミニテーブルを並べてその上に寝ていた。詳細を省いたら単なる変人である。いやどっちみち変人か。

<1日目 2015.09.11(金)>

ホテルの朝食が美味でございました。但し動き出しが減茶苦茶遅かったせいでこの日は

ほとんど移動のための日になった。そりゃ前日夜遅くまで飯食ってりやそうなるよね。

上泉バス停から出るバスの出発時刻まで中途半端に時間があったため、どう過ごすかを巡ってグダグダしていた。結局雑貨屋に併設されている喫茶店で紅茶を飲んだ。

後はひたすらバスに揺られる。あざまサンサンビーチ入口で下車。しかしまあ名前が分かりやすくて大変結構。乗船券を買い、ついでにブルーシールアイスも買い、船に乗って出発を待っていたら、門前氏・藤野氏・アルタンジョラー氏と遭遇。みなさん荷物が多いですね。

久高島徳仁港に到着して、右も左も分からぬまま（っていう表現ありますけど、右と左はさすがに分かると思うんですが）交流館目指して**迷子になる**。これが旅の醍醐味だよね。最終的には和田の力を借りて無事到着。和田すげー。荷物を置き、貸切状態のとくじんで昼食をとり、海岸に行った後は交流館でひたすらグダグダしてました。ちなみにとくじんで黒くてガサガサ動くあの生き物がいたのはここだけの秘密。全員が揃ってミーティングをした後、とくじんで夕食。食ってばかりである。和田は本望だろう。夜は内間豊さんの話を聞く。濃密な話が多岐に及んだ。島の祭祀についてこれだけ多くのことを語れる人がいることに少しびっくり。



男部屋。毎晩ずっとこんな感じ（撮影は14日）

## <2日目 2015.09.12(土)>

この日は朝から運動会準備のお手伝い。非常に強い日差しの下でテント設営やグラウンド整備を行った。しかしまあグラウンドから見える海がきれい。この雰囲気大好き。北原はトンボを持ってグラウンドをひたすら回ってました。尾崎はトンボを捕まえようとして人差し指を立てたまま直立不動。右京さんそっくりである（「相棒」より）。

結構早く終了し、班別のフィールドワークへ。2班は、商店を巡ったり、海岸に行ったり、小中学校にお邪魔したり。薄味フィールドワークである。そういえばポテチの「うすしお味」って全然薄くないですよ。どうでもいいか。

やっぱりとくじんで夕食後、再び内間さんの話（というより質疑応答）。終了後、飲み会っぽいことをやるらしく和田と 2 人で内間商店に買い出しへ。行きは車で送ってもらったのだが帰りは夜道を歩いて帰ることに。街灯が無い。非常に不気味。和田が言うには途中で「見えていた」そうなの。信じるか信じないかはあなた次第。これ 1 人で帰ることになったら完全に肝試しだよ。

交流館に戻ると、どうやら漁港に星空を見に行くらしい。ナイスアイデア。誰かさんのパントマイムが披露されたそうなの。漁港に着き、適当な場所に寝転んで空を見上げると本当に無数の星が輝いていた。こればかりは文字でも写真でもありのままを記録できないのが残念。どこかの小説のワンシーンになりそうな時間でした。

その後酒を投入ししばしご歓談。内容は記憶にございません。

### <3 日目 2015.09.13(日)>

合宿最大のイベントといってもいい運動会当日。入場行進から参加しました。小中学校の校歌が島の雰囲気絶妙にマッチしていて名曲だと思う。是非音源が欲しい。

準備体操の時間もあつたのだがここで思いもよらない事態。流れ出したのは馴染み深いあのラジオ体操第一のメロディーで、いたって普通の体操が始まるかと思いきや…

#### 体操の語りが方言

というまさかの事態に。全くの不意打ちだったので内心大爆笑。途中「おばあ、ちばりよー」とか言っていた気が。絶対笑わせに来てるよね。是非音源が欲しい。

さて、噂に聞いていた 3000m 走の時間。和田がぶっちぎるかと思っていれば彼は流していた。なんて奴だ。ちなみに北原は学校の先生と松村の煽りに乗せられ全力で走って 7~8 位くらいだった。なんとも微妙な結果。ここ数年ろくに運動してないので許してほしい。柳沢さんが女子の部 1 位で表彰されました。素敵。なおここで河合さんが離脱。暑いし走るしで無理もない。

さらに障害物競争にも参加。3000m 直後なのに。おじさん体力の限界ですよ。松村と仲良く麻袋でピョンピョンしました。みんなが何をやったのか書こうとしたがどうにも思いつかない。

さらにリレーにも参加。走り過ぎ。しかもじゃんけんで負けてアンカーに。順番は、

1 走：和田 2 走：花室さん 3 走：松村 4 走：北原

とこんな感じ。いかに面白く走るかを巡って思考が大迷走した記憶がある。結局真面目に走ることに落ち着いた当時の自分の思考に拍手。結果は真面目に走って 2 位という。微妙。学校の先生が速過ぎてびっくり。それに負けなかった和田もさすがだが。ちなみに北原は途中で左足の靴が脱げました。カーブでヒヤヒヤしながらもなんとか転ばず走った自分に拍手。ちなみにその後の数時間に渡って何故か和田・松村に慰められるという意味の分からない事態が発生。お前ら一緒に走っただろ。まあ一連の流れは面白かったのでよしとしよう。





昼休みに表彰される柳沢さん。顔が写ってない…

午後は婦人会の踊りに女性陣が参加。門前さんの動きがちょっと怪しかったですよ。その後全員でフォークダンスに参加したが今度は自分の動きが怪し過ぎ。こりゃ人のこと言えんわ。しかも相手が男ばかり。非常に微妙な時間だった。最後は綱引き+カチャーシー。綱引きは1勝1敗でした。

さて運動会も終わり、片付けの後は反省会と称した宴会がスタート…するはずだったがなかなか始まらないので海岸へ。水着を持ってないのにみんな海へ入る入る。尾崎くんがかなり面白くなってました。多分お酒のせい。ちなみに柳沢さんもやっぱり海にいた。もはや平常運転である。



海と男ども

宴会が始まって間もなく京大生に余興を振られる。しかし我々に芸はない。なんだかんだで花室さん主導でバレエをやるという。結構グダグダだった気が。最後に久貝校長がま

さかの体の柔らかさを披露してなんとかなった。とにかく花室さんありがとう。芸がない男性陣をどうか許してほしい。

宴会ではいろいろな方に話を聞いた。特に興味深かったのは診療所の吉田先生のお話（に藤野氏が加わったところ）。翌日のフィールドワーク先として診療所が浮上。

宴会はお開きとなり、交流館に戻った後もグダグダ話していた気がする。この前日だったかもしれないが、松村がトイレに行こうとしたタイミングで「トイレットマンか」と北原が発したことにより和田・尾崎が大爆笑していた。言った本人何が面白いのか全く分かっていません。そんなことをポンポン言葉に出す自分も相当アレだが。そういえばいつだったか和田に「数打ちゃ当たる戦法」とか揶揄されたっけ。

<4日目 2015.09.14(月)>

15時までフィールドワークタイム。2日目のグダグダを挽回すべく、我々2班が向かった先はなんと最北端カベール岬。しかも東海岸をひたすら北上するルート。砂と岩場の連続で、ときどき植物が生えている光景。そこをひたすら歩く。「フィールドワークじゃなくてフィールドウォーク」という言葉は我ながら的を射ていたのではないか。



東海岸でよく見られたイノー。生き物がいっぱい



面白い地形もたくさん見られた

しかも途中から島の内側の道へと戻る抜け道がなかなか見つからない。しかし「ここまで来たら引き返すわけにはいかない」という謎の根性および川崎隊長のまさかの積極的前進により道なき道を進むことに。しかも川崎さん砂地を歩くのが速いこと速いこと。和田が死ぬ死ぬ詐欺を連発していた。最後はもはやジャングル探検みたいな感じでカベール岬到着。帰りは普通の道を通ったのであつという間に戻って来られた。道は偉大である。

アドベンチャーが終わり昼食を挟んでフィールドワークに戻る。とくじんで北原が小中学校再訪問をゴリ押ししたため学校を訪れるが、なんと校舎の入口自体が閉まっているという事態に直面。北原、嘆く。その後藤野氏が診療所に入っていくのを見て、すかさず診療所を訪問（午前を訪れたら不在だった）。吉田先生から結構踏み込んだ有り難いお話を聞きました。

終了後、柳沢さんに匹敵する勢いで海に行きたがっている和田と海岸へ。川崎さんは別行動。海岸に着いたら柳沢さんがいた。ええ、**予想通りです**。和田は海へ入る。北原は吉田先生から伺ったお話を文字に書き起こす作業。

交流館に戻ると既に鎌田教授が到着されていた。イザイホーについての短い映像を見た後にミーティング。その後とくじんで夕食。もはや自分が笑ったか笑わせたかの記憶しか無いのだけれど。

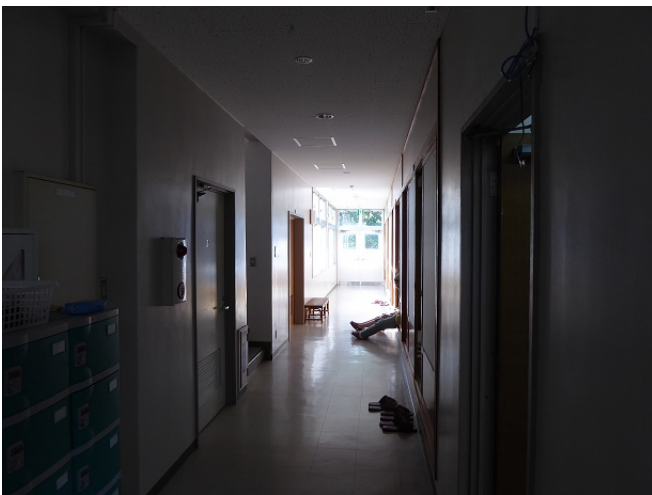
夜は比嘉助監督をお招きして久高オデッセイ第三部を見た。

#### <5日目 2015.09.15(火)>

合宿最終日。早朝に島のおぼあの案内でイシキ浜に日の出を見に行くことに。集合 5:45。久高島の信仰の原点の一端を垣間見た気がする。その後朝食をとって慌ただしく交流館を後にする。ギリギリで9時のフェリーに乗り込んだ。2階からの景色が綺麗だった。



日の出（イシキ浜より）



何度も通ったこの廊下も今では懐かしい

さて本島に戻った後は斎場御嶽を見学しに行くことに。久高島が信仰の対象になっていることを実感し少し感動。途中で女性陣が行方不明になった。みなさん何処へ行ってたんですか。

見学が終わりいよいよ今回の合宿も終わりが近づく。なんだかんだあって港に荷物を置いた松村とは御嶽駐車場でお別れ。尾崎・和田・北原の3名でバスに乗る。バスを待っているあいだ和田が腹減ったと嘆いている。この合宿を通じて何回目だ。さらに途中で門前氏らを乗せたタクシーに追い抜かれる。嗚呼悲しきバスの遅さよ。それにしても最後の別れがバスとタクシーの間で交わされるとは…

上泉バス停到着後、首里方面へ行くという尾崎とはここでお別れ。残った和田・北原でANA クラウンプラザホテル沖縄へ。荷物を預けて国際通りを練り歩くことに。

北原はきれいな琉球ガラスのグラスを購入。勿体無くてなかなか使えない。何のために買ったんだか。昼食を探す道中で和田が**謎のマクド推し**。ここにきてファーストフードかいな。京都で好きなだけ食いなさい。

牧志駅まで歩いてからゆいレールでホテルへ戻る。ちなみにこの途中で和田がトンデモ発言を連発して以後**ここでは書けないような話**が続きました。ホテル内でもずっと続いて下衆な盛り上がり方をした。まあ煽ったのは私ですが。那覇高校前のカレー屋で夕食をとり終了。勘定が100円違ったような…

<最終日 2015.09.16(水)>

もはや帰るだけです。始発のゆいレールに乗り、朝早い便で関空へ。和田とは天王寺でお別れ。おしまい。

### 3. ちょっと真面目なレポート —合宿総括—

ここからが本レポートの本題なのにもかかわらず、既に5,000字近くを費やしております。関係各所の皆様に深くお詫び申し上げます。

さて、今回の合宿を振り返って、書き留めておきたいことを挙げていく。

#### ○久高島の印象

久高島を訪れる以前にポケゼミで扱っていた内容から、この島に対する印象というのは古くからの信仰が根付いた島といったものだった。しかしながらいざ久高島を訪れてみると、実際は良くも悪くも予想に反するものだった。多くの観光客が訪れているのもあったが、いかにも沖縄らしい町の風景やきれいな砂浜があって、「ふつうの島だな」という第一印象であった。

それでも、フィールドワークを通して祭祀施設や岬の風景を目にすると、久高島のかつてのありようがなんとなく推察できた。イシキ浜から日の出を見ると、人々が信仰心を篤くした理由がなんとなく感じ取れた。斎場御嶽で久高島が実際に信仰されていた場を見ると、久高島のあり方を再確認した。訪れた第一印象は「ふつう」だったけれど、随所に久高島の根本的な部分を垣間見ることができた。

#### ○久高島大運動会

単なる学校の運動会ではなく、島の一大イベントであるこの運動会に参加できたことはとてもいい経験となった。観光客として島を訪れただけではなかなかできない経験である。このポケゼミ合宿自体が数年前から続いていることもあって、自然と溶け込めたのが有り難かった。参加した種目は3000m走、障害物走、リレーとなんだか走ってばかりだったが、久高幼小中学校の児童・生徒がメインの種目や前日準備を見ていると、彼らが少ない人数

の中でも（いや、だからこそだろうか）協力して取り組んでいる姿が印象的だった。島の雰囲気も相まって、非常にのびのびと育つことができる環境なのではないだろうか。

運動会後に行われた反省会でも様々な方に話を伺えた。内間豊さんは酒を飲むことが至上の趣味というふうに語ったが、確かにこのような宴会の場で人と人の関係を深めるのだということが実感できた。人どうしの距離が近い島という空間ならではだと思ふ。学校の久貝校長にも温かく迎え入れてくださった。

話を書き留めるタイミングが無かったので今となっては詳細を思い出せず残念だが、ひとつひとつの話が島の現状や問題を率直に言い表したもので、非常に興味深かったのは確かである。

#### ○フィールドワーク

運動会への参加と並んで本合宿を行う大きな目的のひとつといえるこのフィールドワークであるが、（私の感覚では）我が2班は至らない点が多々あったように思う。特に事前準備の不足が痛かった。こればかりは慣れが大きいと思うのである程度は仕方ないと思うのだが、反省すべき点であった。

そんな中でも話を伺った方々は嫌な顔せず対応してくださってたいへん感謝している。すみれハウスの方、内新商店の方、農作業中だった女性、診療所の吉田一隆先生などのご協力を今一度ここに書き留めておきたい。

人に話を伺った以外にも、フィールドワークでは久高島の自然を存分に体感した。海はもちろん美しく、特徴的な地形が島を縁取っていた。動植物も数多くあって、都市の風景とは異質の自然の姿がそこにはあった。こういう風景に惹かれて多くの観光客が訪れるのだろう。

#### ○ポケゼミメンバー

最後に述べずにはいられないのが、この合宿で時間を共にしたポケゼミのメンバーについてである。ポケゼミ担当教官の鎌田教授はもちろん、門前氏・藤野氏・アルタンジョラー氏・柳沢さんがいたからこそこのような素晴らしい時間を過ごすことが出来た。ありがとうございました。

そして何よりも、1回生のみんなと同じ時間を共有できたこと嬉しく思う。まだまだ互いに知らないことが多い人どうしで結構長い合宿に行って、これほどまでに心地よい時間を過ごせたのは、間違いなくみなさんのおかげです。特に同じ2班の川崎さん、なにかと頼りない男2人をよそに至る所で活躍してくれてありがとう。そして和田くん、今回の合宿で恐らく一番近い存在だったと思いますが、これほどまでに一緒にいて楽しくて気の置けない（と自分が勝手に思っているだけか）人に同じポケゼミ・同じ班に当たったことを本当に幸運に思います。奇跡と言ってもいいかもしれません。

今回のポケゼミを振り返ってみると、一番の成果はこの人間関係の深化にあったのでは

ないかとさえ思えてくるのであった。

#### 4. おわりに

文字数に上限が無いことに甘えて中身の無いことを長々と書き連ねてきたこのレポートも終わりである。この自己満足のためだけのレポートを提出したことを今更ながらお詫び申し上げたい。

我々が久高島で過ごしたのは 5 日間であった。島で流れる時間はゆっくりとしたものだったと記憶しているが、終わってみればこの 5 日間は一瞬だった。なんとも奇妙な時間である。それでいてかけがえのない時間であり、濃密な時間だった。

このポケゼミを通じて実に様々な出会いがあった。島の方々もそう。ポケゼミメンバーもそう。とりわけフィールドワークでは初対面の人との数多くの出会いを経験した。まだまだ未熟だが、フィールドワークの基礎を学ぶことができたのではないだろうか。

そしてこのポケゼミメンバーとのつながりをこれからも大切にしたいものだが、誰かがアプローチしないとなかなか難しいのが大学という場所の難しさだろうか。是非何かの機会ですれ会えればと思う。

最後に蛇足。私事で恐縮だが、このレポートの執筆期間に 20 回目の誕生日を迎えた。誕生日にもキーボードを一心不乱に叩かなければならないのがなんとも残念だが、今回の旅を振り返りながら迎えるのもまた悪くない。

2015.09.30

締切日、日付が変わる直前で

.....

## 久高島レポート

教育学部四回生 柳澤友里亜

「来年は一緒に行きたいね。」と、友人や家族に言っています。

久高島は、はじめに想像していたような「神の島」ではありませんでした。そこで出会ったのは、どこまでも具体的な人々と、動物と、虫と、植物と…、とても豊かで、自然で、それゆえどこまでも「普通」の、生の姿でした。圧倒的な「神々しさ」に呑まれるような体験はなく、しかしゆったりしたその空気の中には「何かある」…、そんな不思議な島だと思いました。

思い返せば、カラッと晴れて、海で遊べて、日に焼けて…とまるでバカンスのような過ごし方のできる場所でした。けれども、そこには外国の南の島とはまた違う趣がありました。その差はうまく言葉にならないのですが、少し粘度の高い伝統の感触とでもいいでしょうか。自然や世間の陰しさ、そして悲しい過去を、きちんと記憶している、そんな厚みだったのかもしれませんが。久高島の癒しは、大げさに明るいわげではない、トロンと和やかな雰囲気の中かにありました。「日本」だな、と感じました。

一方、今でも印象的なのが、内間さんに伺った「イザイホーは大陸由来の儀式であろう」というお話です。それまで神事には漠然と、八百万の神を祭る古代日本の信仰のおおらかな雰囲気を想像していたので、システムティックな大陸由来の輸入品だという解釈の冷静さには、ハッとさせられました。そういえば、港の東屋で地元のおじさんたちが方言で会話している音が、まるで朝鮮語のやり取りのようだなと、昼寝に入りかける頭で感じたことを思い出します。「日本」と安易に一括りにはできない、奥深い歴史をあらためて想われました。久高島は、故郷のように落ち着く場所でありながら、異国のように刺激的な場所でもありました。

さて、沖縄本島での出来事です。最終日、島を発ち、皆で御嶽をまわってから、一人で市場の辺りをウロウロしていた時、たまたま路地裏で神女の女性と再会しました。朝、同じ便のフェリーに乗っていた彼女は、お菓子屋さんへ向かうところでした。来週、島で傘寿（もしかすると米寿か白寿か…すみません）のお祝いがあり、そのときのためのお菓子（飾り文字の書かれた大きなお饅頭）の予約に行くのだそうです。なぜかこの再会はとてもうれしくて、心に残っています。そういえば、ちょうど島へ向かうフェリーでも、息子のためのバースデーケーキを持ったお父ちゃんがいたなあ、と思い出したりしました。ニライカナイからやって来るモノあれば、本島からやって来るケーキ（もしくは饅頭）あり。



さてその後は、集会所にあったガイドブックで気になった「桜坂劇場」へ行ってみました。そこは映画館、カフェ、ワークショップスペース、本や雑貨のお店などが合わさった、おしゃれで、サブカルチャーの雰囲気も漂う施設です。都合よく観ることのできる作品はひとつしかなく、『野火』という映画を観ることになりました。それは、フィリピンに降り立った日本兵の物語で、凄まじい描写による戦争映画でした。途中で席を外す地元の叔父さんもいたほどです。私も何度も目を背けざるをえない場面に会って、もう嫌だ、とも思いましたが、最後には映画としての救いがあり、今は観れてよかったと思っています。皆で観た『久高オデッセイ』、そして『野火』、ふたつの映像作品の趣は大きく異なりながらも、ものづくりの根底にあるエネルギーや祈りについてはきっと共通しているのではないかと思いました。感動と衝撃をもらった二つの鑑賞体験は、それぞれ強烈な思い出となっています。

この夏、ようやく沖縄に「初めまして」のご挨拶ができました。今年が戦後 70 年の節目とはよく言われることですが、このタイミングにこのようにして彼の地を踏めたのはとてもありがたいことだったと感じています。

今でも、久高島のシャープな身体つきの猫、蝶の悠々とした飛行、エイサーを舞う青年のまっすぐな瞳を、新鮮に思い出します。

みなさま、このたびは、ほんとうにありがとうございました。

2015 年 10 月初旬

日焼けが消えてしまう前に！来年の 3000m 走連覇を目指して！

柳澤友里亜

.....

## ゼミ合宿を振り返って

京都大学こころの未来研究センター・研究員

(ポケットゼミ 2015 アシスタント)

門前斐紀

私は4月から比嘉康雄さんの本を読み、大重潤一郎監督の映画を見るなかで、フボー御嶽に佇む母神や、異界のヒジムナー、生活の隅々に祀られる神々や掟のマブイのことを考えていました。こうした伝統的な世界観は、現代は次第に薄らいできているとの記述もありましたが、私にはどうもそのような世界がありそうで仕方ありませんでした。島に行くことは、とても楽しみで魅力的である一方、どこか畏れ多いことでもありました。

でも、実際に島に行ってみると印象はまた違いました。久高殿や井泉の入口、民家の壁の御恩には伝統が息づきながら、そばには海ぶどう栽培プールや塩のビニールハウスがあり、観光客がレンタル自転車に乗って行き交っている…知らない文化に触れる際に遠慮は要らない、排他的にならずどんどん行けば良い、というお話を1日目に内間さんより伺いましたが、まったくその通りでした。イザイホーの伝統も、自然発生的というより、大陸の都から祭祀のプロにより伝えられたとの説。かなりインパクトがありました。

潮に乗って文化の種が行き来することは、今も着々と続いているのかもしれませんが、現に、合宿メンバーは、ずっとそこにいた人のようにすぐに風景に溶けこんでいて、一人ひとりのアンテナが島空気のなか、ぐんぐん伸びているようでした。

合宿中は全日好天で、身体が蒸発しそうな強烈な太陽の下では、人間の死生を結ぶ祭祀や祈り、ニラーハラーへの追想は、思った以上に切実に感じました。(4日目朝のフィールドワークでは、島で一番長い砂浜「うばーま」でギリギリまでひからびたところを助けてくれて、河合さん柳沢さん、ありがとうございました…!) 研究では芸術哲学のような分野にいますが、ダイナミックな自然の循環に身を置くことで、今まで文献に映る「写真」として見ていたような、芸やわざの端緒に触れた気がしました。見れば見るほど星が出てくる真っ暗闇や、雲のなかを歩けそうな彫りの深いご来光、初めて見たり聴いたりした生き物の声・姿など、島のインパクトは今も鮮やかです。

大運動会では、前日の準備から踊りの練習、ダンスに懇親会と、一行を多くの輪に迎えて下さり、ありがとうございました。久貝先生、久高島ご関係者のみなさまには深く御礼申し上げます。最後の夕方には、通りすがりに「さばに」にお誘いいただき、宮良先生みなさまありがとうございました。中学生のみなさんが話してくれた将来像はとても力強く、

運動会に引き続き自然を身になじませた姿がまぶしかったです。

最後になりましたが、このような機会をいただきました鎌田先生、2015 年度久高島研究と合宿メンバーのみなさん、藤野さん、アルタンジョラーさん、半期の間また5日間、どうもありがとうございました。合宿の終盤には比嘉助監督と伊豆さんにお会いでき、現地で『久高オデッセイ』風章の大重監督のお声を聴けたのも幸いです。鎌田先生が3月にご退職されるため、ゼミ合宿としての旅は今回が最後とのことですが、これからも何かのかたちで久高島との交流が続き、輪が広がっていきますように。私もまた伺いたいです。このたびはありがとうございました。

2015.10.01

みんなのレポートに便乗して  
門前斐紀

## 編集後記

提出されたレポートを読んでいると、つい気分は久高島だ。9月半ばに京都に戻り3週間、季節を一気に飛び越し、しばらくは浦島太郎になったようだった。

先ほど研究室で鎌田先生が、「沖縄・久高島研究」を始めて4年が経つと言われた。私は今年の4月にセンターにきたが、同じ研究室の先輩で前年度まで研究員をされていた奥井さんよりお噂は伺っていた。毎年夏休みに「久高島」に行き運動会に参加しているらしい…数年前までただ「いいな」と思っていたゼミの最終回に、こんなかたちで関わらせていただけるとは(!)2012年度から始まった4回のゼミと合宿。時期と行程は同じでも、巡りあわせと一人ひとりに感じられたことは全然違うだろう。寄せられたレポートを見てもつくづくそう思う。

ポケゼミ「久高島研究」2015の巡りが様々な芽を出し、いろんなところでつながっていくようお祈りしつつ、レポート文集をお送りいたします。

2015年10月6日  
門前斐紀